

小樽商科大学

卒業記念



昭和41年

若人逍遙の歌

高島 茂作詞
宮内 泰作曲

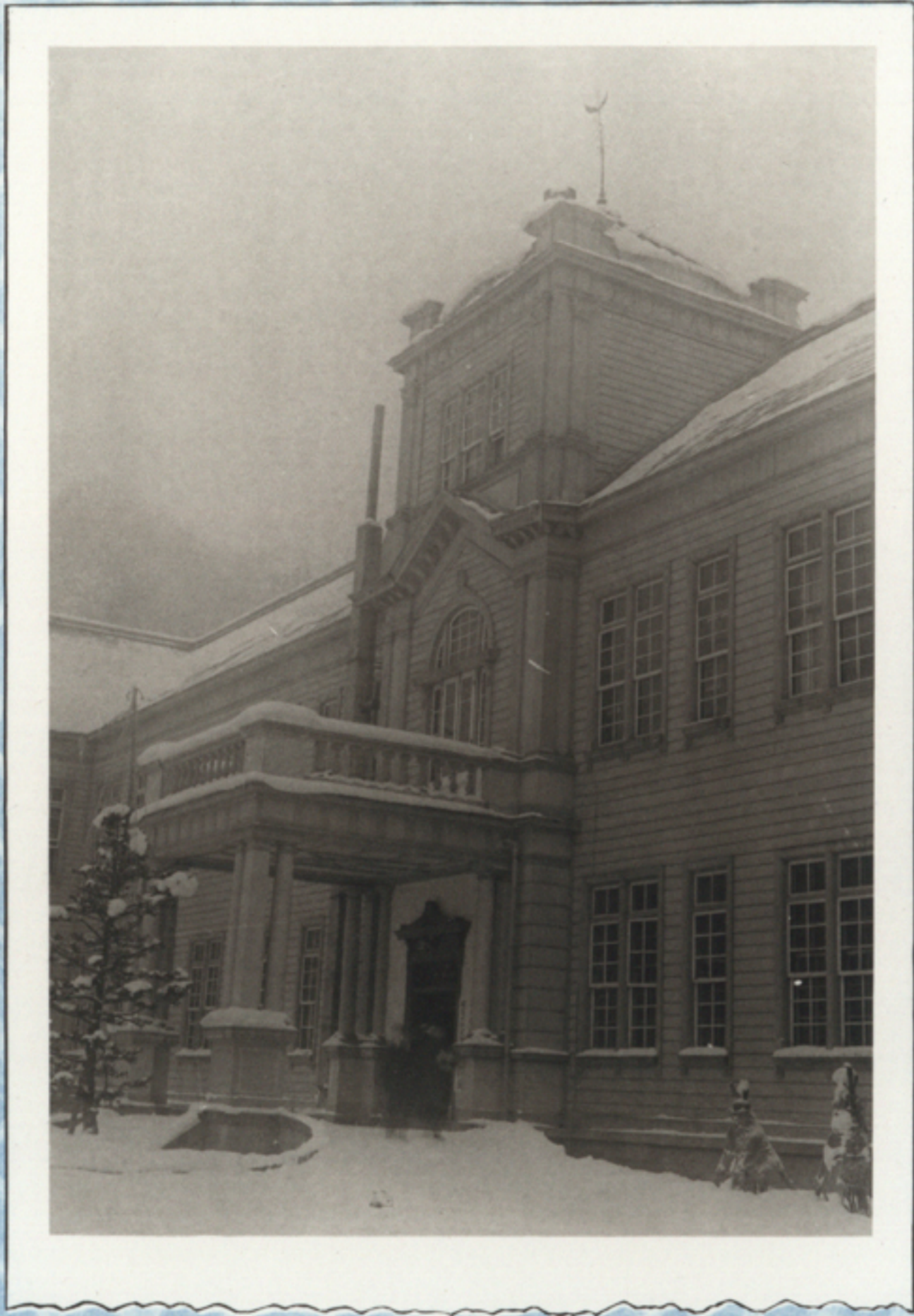
琅玕融くる緑丘の春曙を彷徨えば
浪慢の靄に街沈み風悠久の言葉あり
瀾采の桜花吹雪つ、慥たしくも逝く春の
伝統ふるき学び舎に展げる海の涯しなき

夏白樺に囁やきてハイネの詩を口誦む
眉目美わしき眠差の又なき時のひとおしき
断崖落ちて波砕けオタモイ遠く帆走れば
小樽の嶺々の夕あかね冴ゆる北斗に嘯ぶきぬ

秋蕭条の想い濃きホプラに懸る雲消える
流転の行旅夢に似て悩みの思惟を誰か知る
感傷笑う事勿れ桜が丘にたえずみて
泪滂沱と憂愁の落葉の行方哲うかな

永雪海に傾きて月寒ければ繻とかん
海冥行路遠けれどわれに港の乙女あり
流星落ちて影もなし行く青春の足音に
生命を惜しむ若人は永劫の杯酌まんとす





小樽商科大学校歌

時雨音羽作詩
杉山長谷夫作曲

金鱗をどる渺々の

あけぼの称う波の唄

エルムの花に若人の

涯なきのぞみ数々秘めて

夢うるはしの緑丘よ

夕陽映ゆる白樺の

梢をわたる風の唄

慈愛の山のふところに

銀翼みがき駿足秘めて

唄ほがらかなの緑ヶ丘よ

蒼穹はてず道つきず

はるかに仰ぐ北斗星

栄冠迎ふこの腕に

飛躍の力ひととき秘めて

花咲き匂ふ緑ヶ丘よ

健腕拓く五大州

凱歌はあがる我母校

感激みてる若人の

血潮に清き教へを秘めて

春永遠の緑ヶ丘よ

狭い国土のなかで人間がひしめきあっているようなこの国では、人々が自分の良心に従って生きて行くのは容易なことではない。正しく生きようと思えばわが身が亡ぶ。理に外れた行為に徹すれば他人を傷つける。住みにくい世の中である。こんな世界のなかで諸君のおさめた学問はどんな役目をはたすのであろうか。学問は処生の一つの術や出世のための道具なのだろうか。自分の利益のためならば他人はどうなってもよいという考えを育てるための学問なのだろうか。とかく学問をする人間は実利におち入り易い。

どんな学問をやっても実利に走れば世は末になる。原子力の学問も実利にすぎると原子爆弾で破壊を試みたくもなる。経済や商業の学問は元来実利を目標においたものだけにそれに対する考え方を一歩誤るとそれこそ末世観に墮することになる。もしそれだけが目的であれば收て高度な学問をする必要はない。それ処か邪魔にさえなる。

諸君が大学で経済学や商業学を学ぶのはそんな実利のためだけではない。どんな学問でも、間不在の学問は単なる知識であって学問ではない。ましてや経済学や商業学から人間がはずされてしまうとそんな学問は邪道である。私は経済や商業に携っている人達のうちが一番悪い、不肖な人間と一番すぐれた高潔な人間との両端のあることを知っている。前者は自分だけの欲で生きている我利我々の人間であり、後者はその醜さを知るが故に人間性の高貴を大切にしている人である。これからの世界はこうした人物の出現を待望している。諸君はこの期待に対して今後どのようにして答えてくれるか、私はそれを楽しみにしている。



加茂儀一 前学長



松尾先生



岡本先生



石川先生



川村先生



久木先生



川上先生



武隈先生



木曾先生



広田先生



藤沢先生



古瀬先生



齊藤先生



浜林先生



麻田先生



脇田先生



伊藤先生



阪口先生



吉武先生



地主先生



一色先生



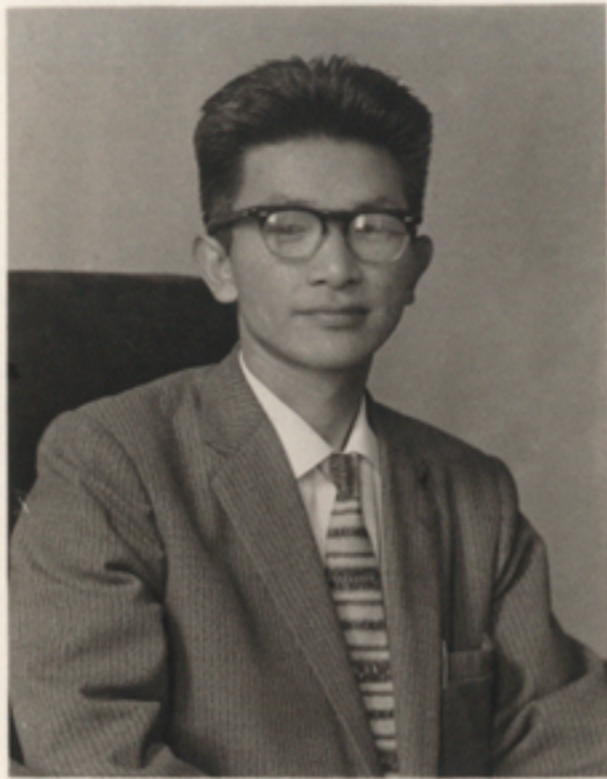
桑原先生



竹内先生



宇賀地先生



田中先生



飛田先生



杉山先生



中川先生



藤井先生



早見先生



松本先生



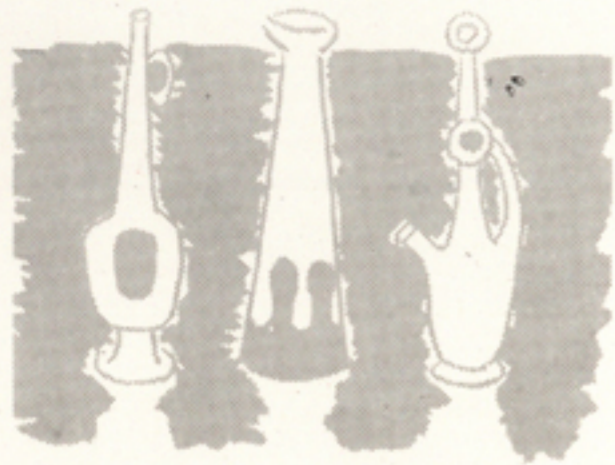
スミス先生



久納先生



久野先生



進藤先生



馬場先生



相原先生



実方先生



沼田先生



松田先生



北村先生





向川先生



小宮先生



北市先生



マチルド先生



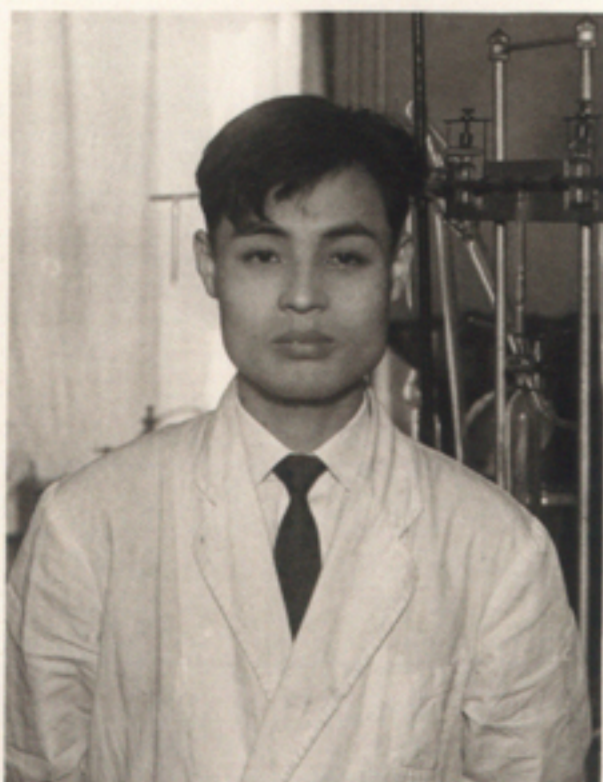
金巻先生



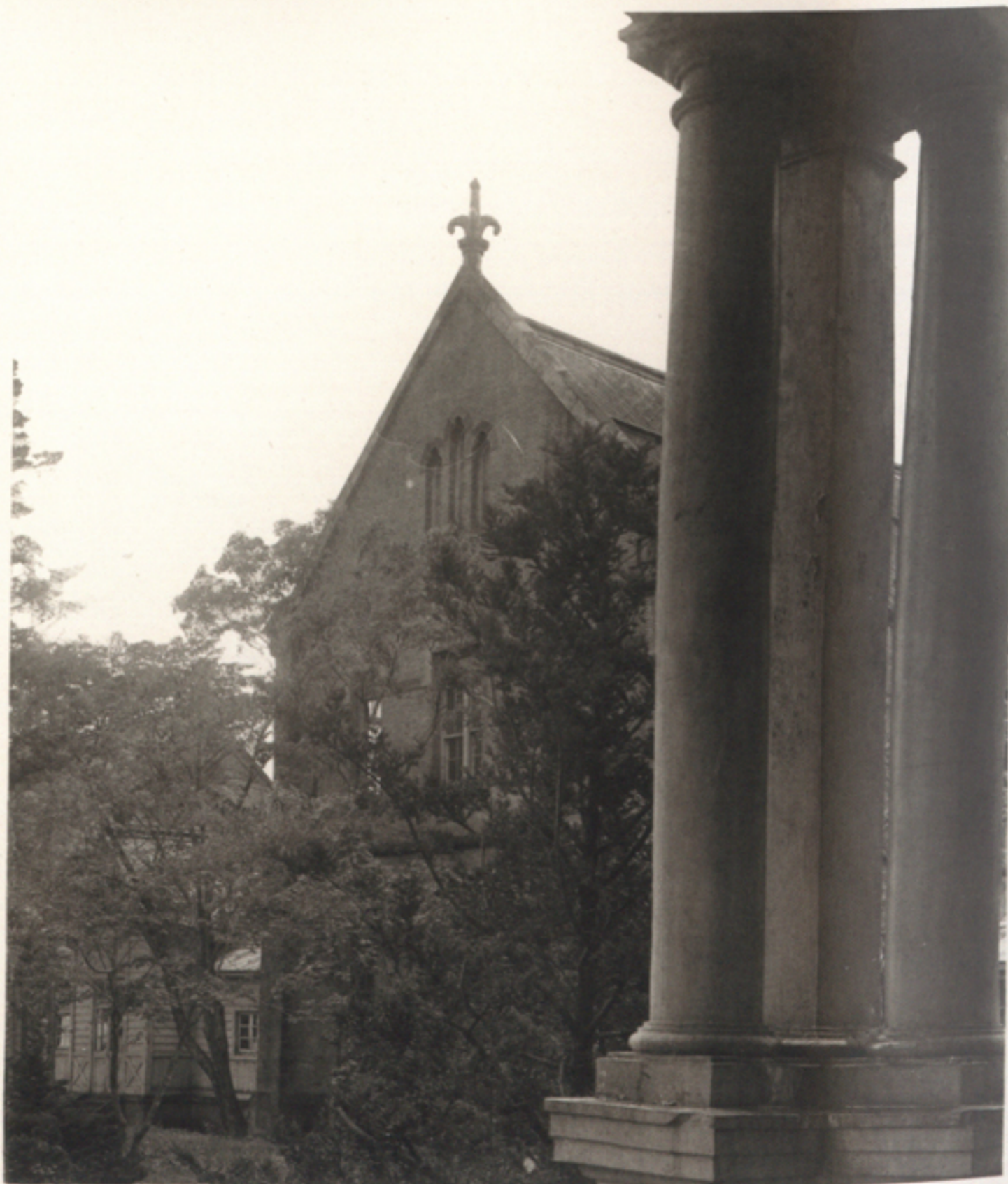
野尻先生



高島先生



村上先生



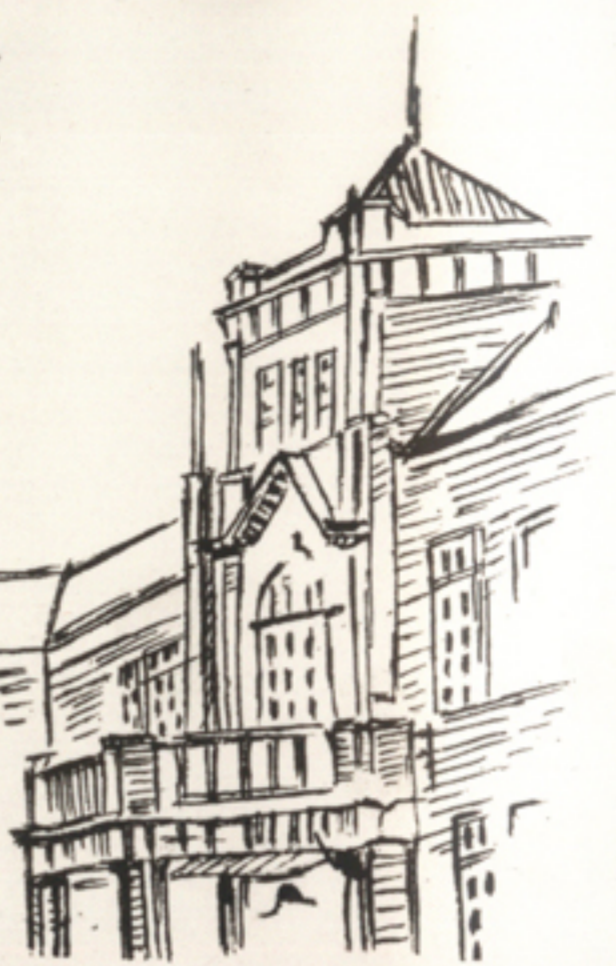


マクラウド先生



大野先生

丘を去りし師



喜多先生



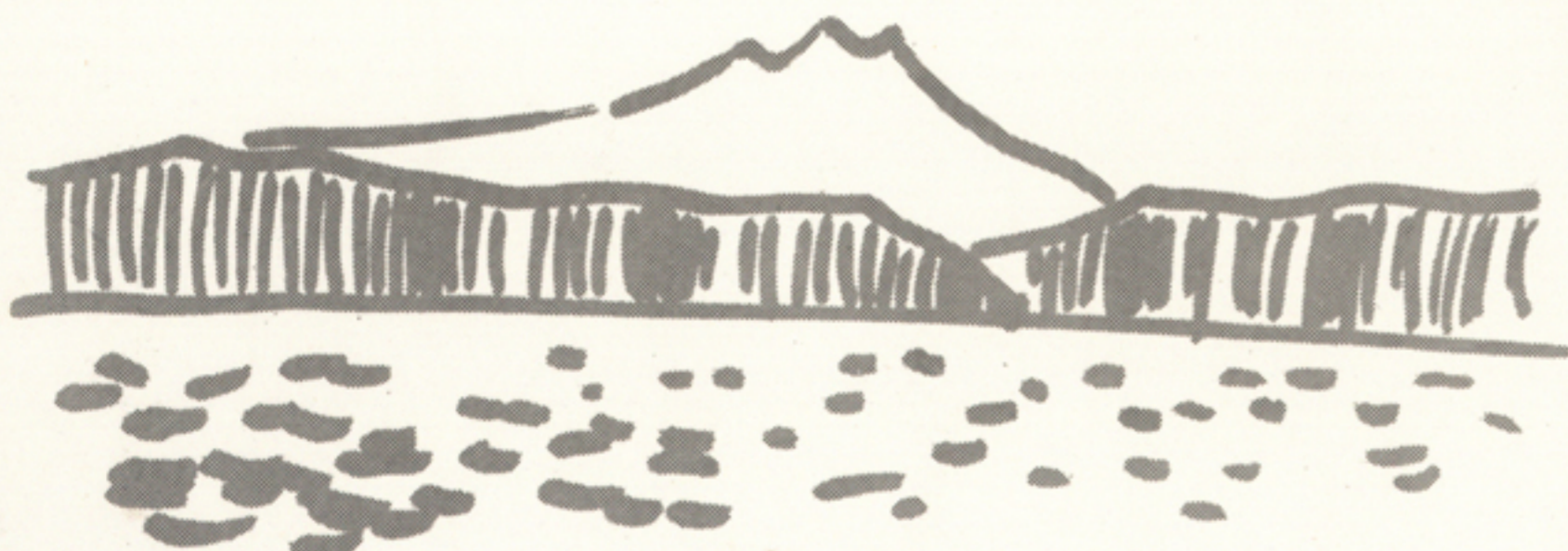
リー先生



清水先生



室谷先生



SIKOTU KO-YORI SIRADI



玉井先生



関先生



Le Pays

Ma France, Quand on a nourri son coeur latin
Du lait de votre Gaule,
Quand on a pris sa vie en vous, comme le thym,
La fougère et le saule,
Quand on a bien aimé vos forêts et vos eaux,
L'odeur de vos feuillages,
La couleur de vos fours, le chant de vos oiseaux,
Des l'aube de son âge,
Quand amoureux du goût de vos bonnes saisons,
Chaudes comme la laine,
On a fêcé son âme et bâti sa maison
Au bord de votre Seine.....
Quand pendant vos étés luisants ou les lézards
Sont verts comme des fèves,
On a senti fleurir les chansons de Ronsard
Au jardin de son rêve,
Quand on a respiré les automnes sereins
Ou coulent vos résines,
Quand on a senti vivre et pleurer dans son sein
Le cœur de Jean Racine,
Quand votre nom miroir de toute vérité,
Émeut comme un visage,
Alors on a conclu avec votre beauté
Un si fort mariage
Que l'on ne sait plus bien, quand l'azur de votre œil
Sur le monde flamboie,
Si c'est dans sa tendresse ou bien dans son orgueil
Qu'on a le plus de joie.

Anna de Noailles.

大黒 マチルド



ゼミナール



古瀬ゼミナール

	坪	岸		長		
	谷			谷		
		正		川		
	光	絃		靖		
				雄		
松	高	古	新	若	齊	村
本	橋	瀬	屋	林	藤	井
	賢	先	敷	信	紀	敏
明	治	生	洋	夫	夫	夫
			一			



麻田ゼミナール

坂	岩	態	井	高	竹
詰	井	倉	出	井	内
	雅		隆		充
勉	昭	博	司	明	男
渡	塩	麻	中	芳	
部	井	田	尾	賀	
	能	先	宏	謙	
明	成	生	充	治	



浜林ゼミナール

嶋白小茅浜板小
 田浜川根林坂森
 将尚一先孝照
 亜三典健生二三



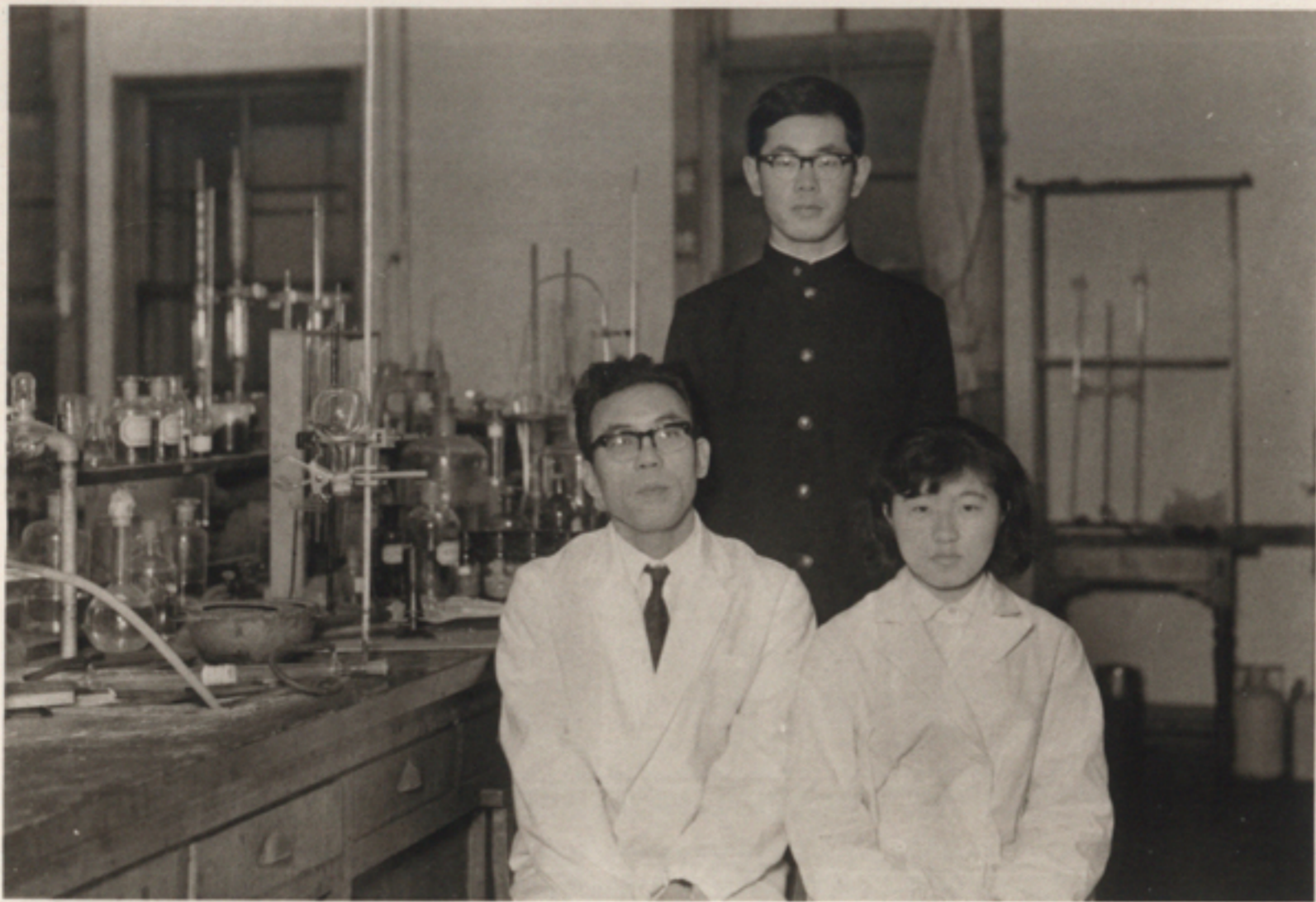
馬場ゼミナール

椎高	川	内	小	若	八
名橋	島	田	西	松	柳
昭忠	義	孝	京	道	英
夫男	人	和	治	範	男
	梅	内	馬	深	佐
	津	堀	場	滝	藤
	忠		先		五
	貴	厚	生	免	三
					六



藤沢ゼミナール

永	宮	小	本	岩
田	田	林	間	見
和	昭	正	勤	
雄	忠	章	一	士
	藤	古	真	阿
	野	田	田	部
	淳	勝	俊	
	一	栄	剛	雄



齊藤ゼミナール

中村 昇

齊藤先生 萩原助手



進藤ゼミナール

岸川進本吉
松藤間田
邦真先正
夫紀雄生運司



早見ゼミナール

早 登 紅 齊
見 坂 露 藤
先 宏 雅 得
生 之 夫



木曾ゼミナール

森	田	松	壇	三	野	中	高	小
島	頭	野	上	田	坂	野	柳	柴
竜	悠	正		地	康	宏	雅	弘
興	輔	明	滋	夫	宣	一	美	之
入	小	吉		木	千	同	平	
江	沼	岡		曾	葉	本	塚	
晴	幹	克		先	裕	徹	浩	
孝	夫	人		生	三		二	



藤井ゼミナール

上		松	
田		山	
成			
城		隆	
	平	松	
	塚	田	
	道	邦	
	矢	彦	
山	神	宮	藤
崎	谷	平	城
樂	一	榮	井
一	勝	仁	先
			生
			明



実方ゼミナール

		浅
		田
		孝
		之
大	実	谷
家	方	原
昭	先	修
夫	生	身



石河ゼミナール

水宮	大	高	福
越内	西	見	田
啓昭	教		登司雄
藏治	文	学	
知	佐	石	菊
念	藤	河	田
	隆	先	清
宏	寿	生	次



吉武ゼミナール

木	田	
村	村	
	良	
攻	勝	
鈴	吉	高
木	武	橋
	先	東
保	生	吾



岡本ゼミナール

後	藤	平	上
藤	田	尾	田
田	耕	一	康
甲	二	弥	雄
山	道	前	岡
田	幸	川	田
耕	勝	敏	隆
三	也	康	一



西川ゼミナール

宮下西舟安杉森柏佐小
 下川川本達本吉崎木野
 佳哲先秀和匡哲俊喜
 宏雄生男興彦也雄四茂



松田ゼミナール

松難吉小松山寺
 岡波田島田崎山
 良克隆先敏
 行己雄明生一達



下柿
 山沢
 田昌
 耕昌
 造治



ゼミの後は……学館喫茶部

定期戦



南蛮おどり



挑戦状を読み上げる団長



対北大

体育会



バスケット部



空手部



剣道部





硬式庭球部



自動車部



スキー部



水泳部



柔道部

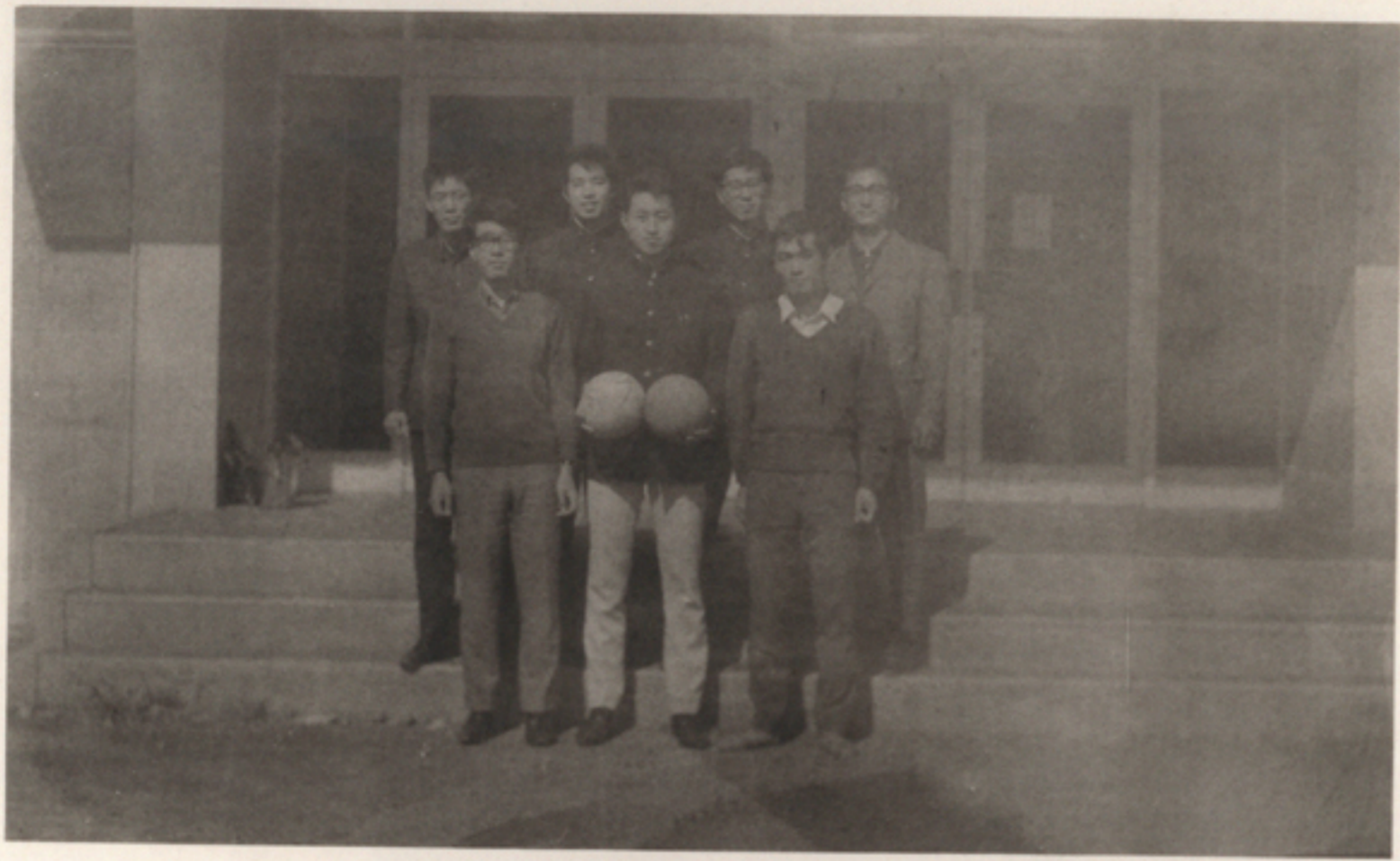


準硬式野球部



ヨット部





バレー部



卓球部

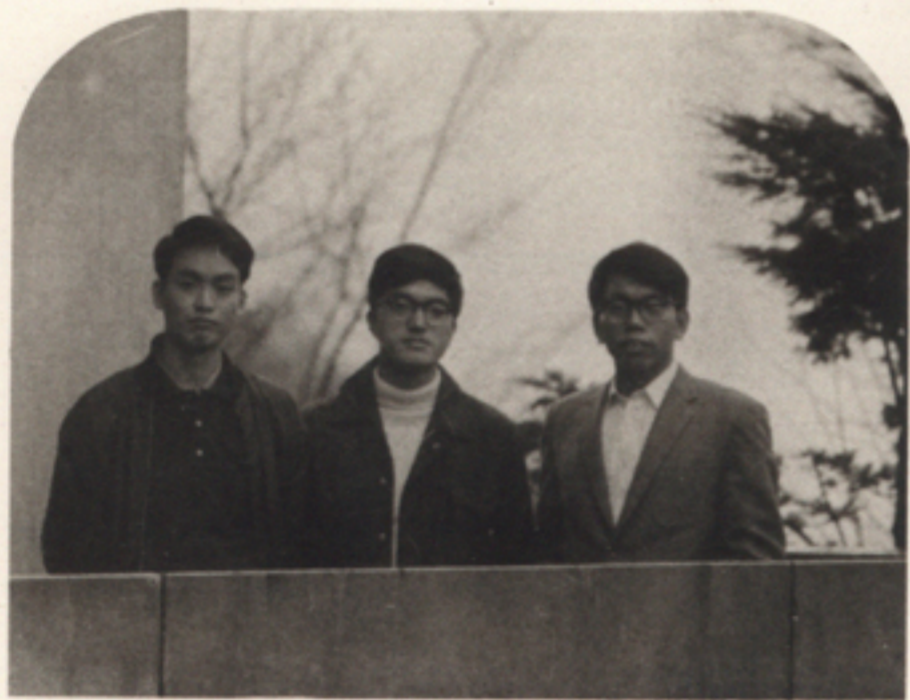


ポロ部





ラグビー部

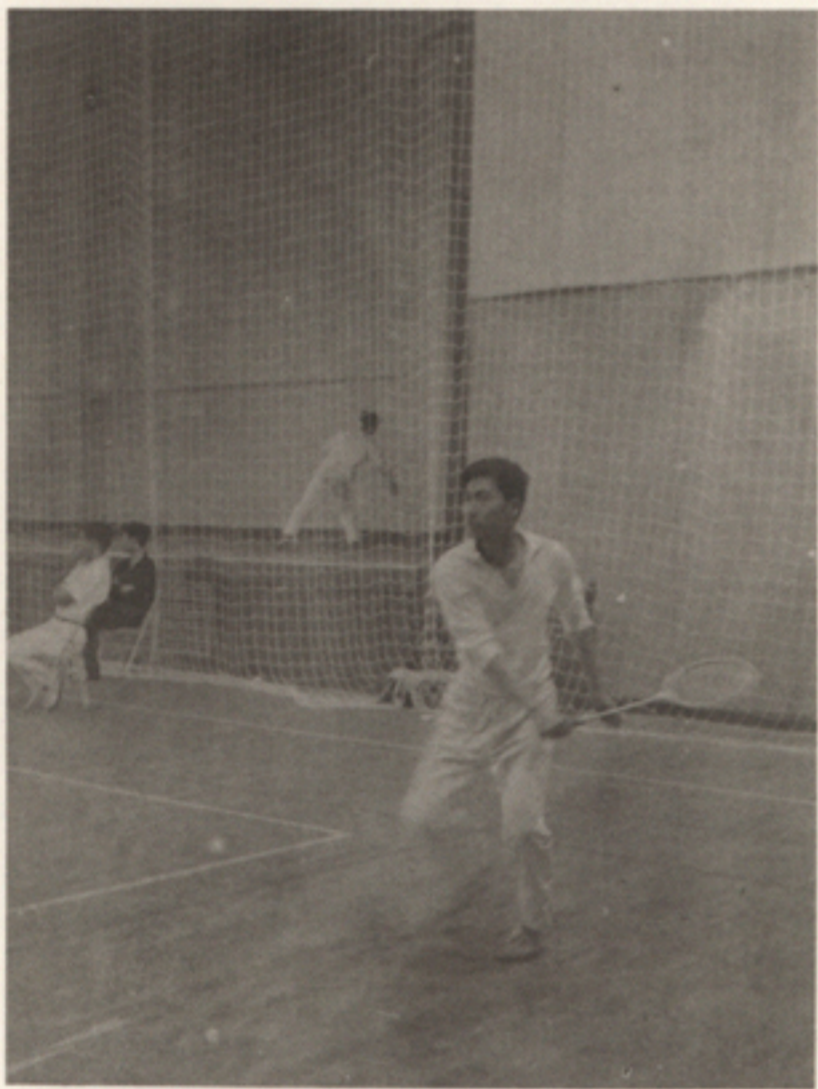


山岳部





硬式野球部



軟式庭球部



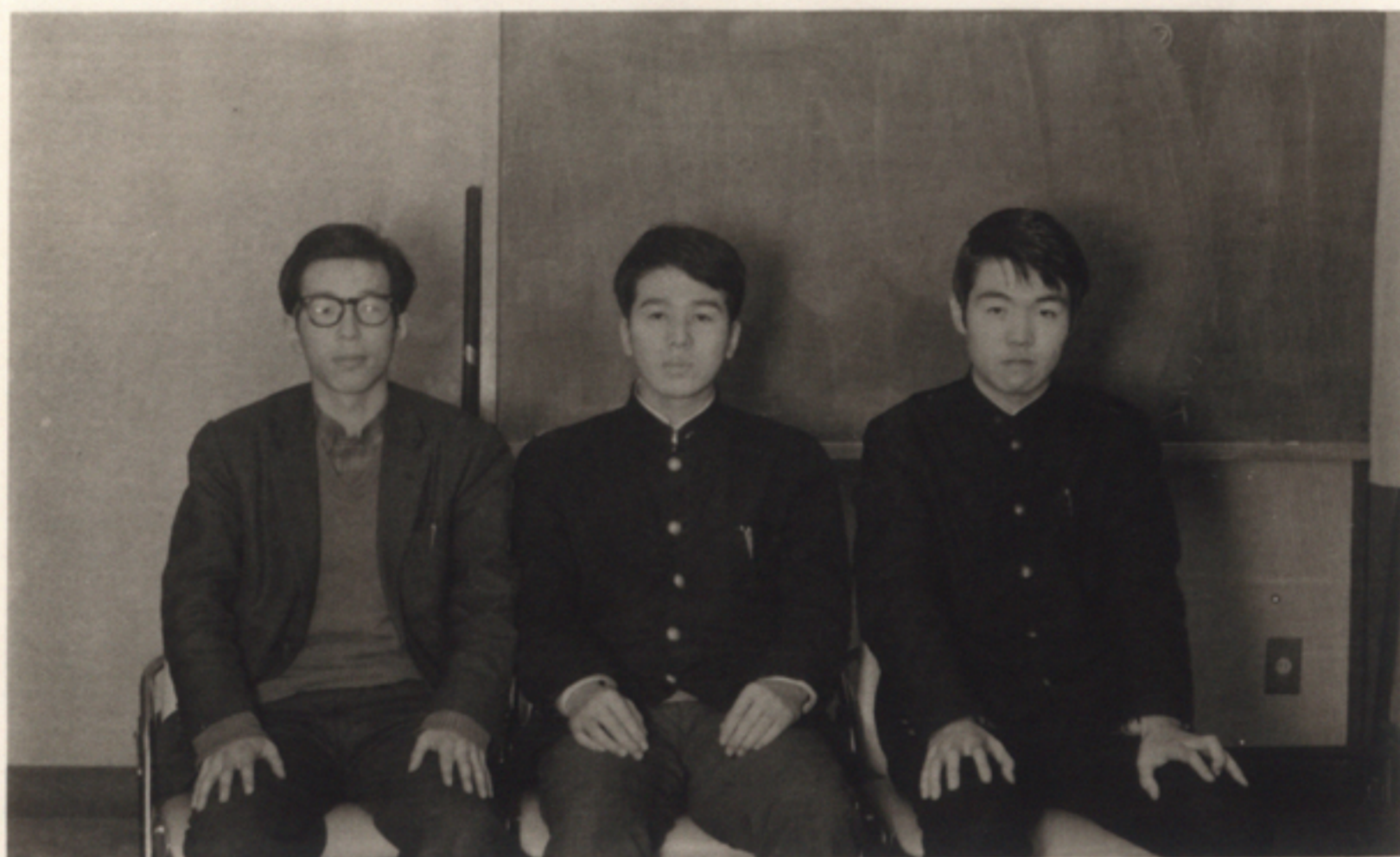
バドミントン部



社 研 連



国際問題研究会



アジア研究会



歴史学研究会





商業調査研究会



新 緑
 聞 丘
 三 五
 〇 号
 四
 〇 周 年 記 念 号



新聞会

小樽商大緑丘新聞

大 立 六 機 費

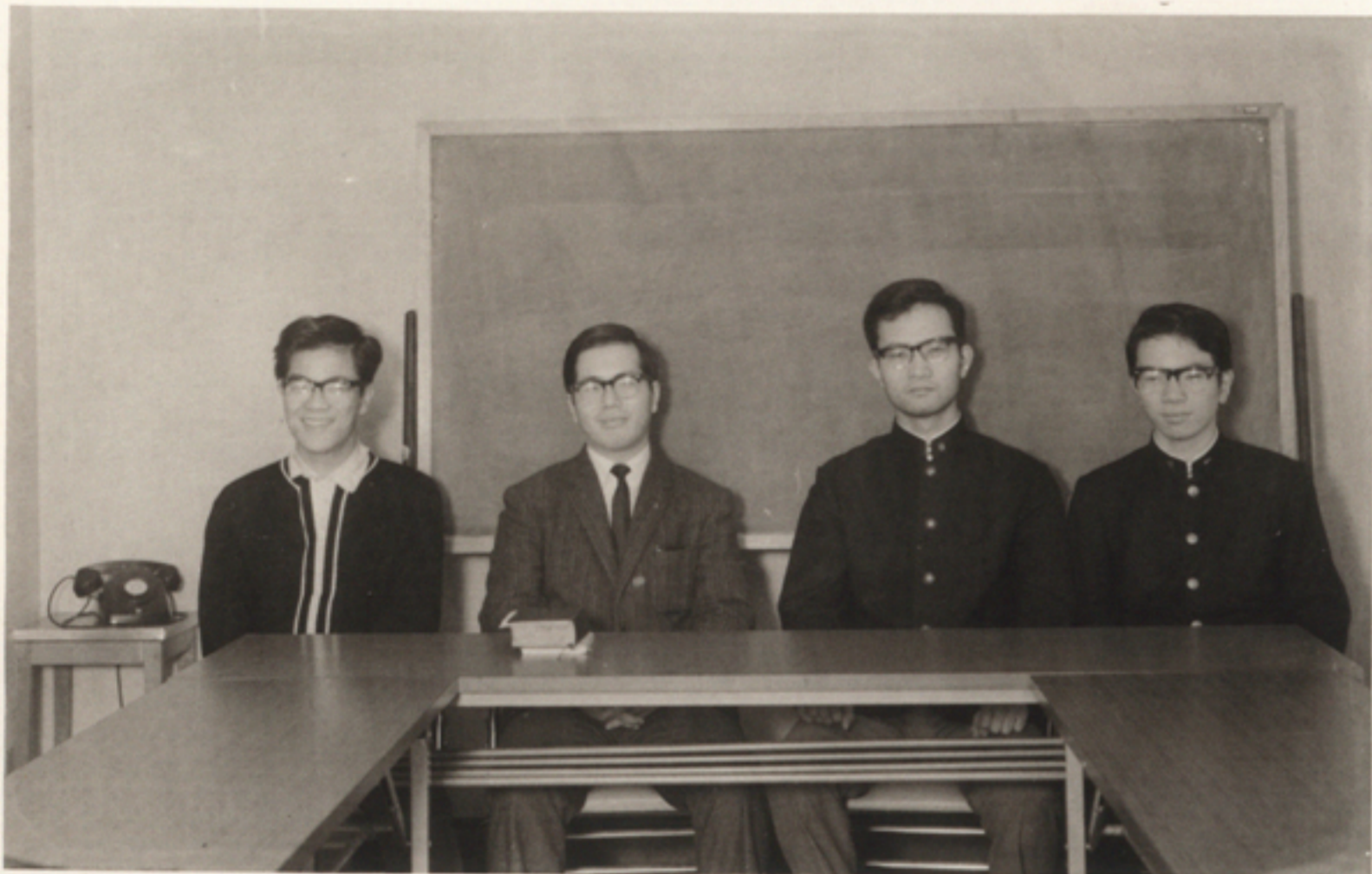


ゼミナール協議会

文
連



E · S · S



Y · M · C · A



愛情



文芸部



小樽を賞る人々



尺八部



将棋部



詩吟部





レコード音楽研究会



作品 その1



グリークラブ



どう撮ろうか？



写真部



鳥さまごま

飛田 茂雄

タンポポ、はりえんじゅ、桜、ライラック、たにうつき、はまなすと百花乱れ咲く五月末から真夏にかけて、南大のキャンパスはにぎやかな鳥の声につつまれる。東南アジアからはるばる飛んできたかっこう、日南三鳥のひとつといわれるおおり、そしておなじみのうぐいす、もちろんすずめも加わって。

小樽へ来てから植物の名はだいぶ覚えたが、鳥のほうはなかなか姿を見せてくれないのでさっぱり名まえがわからない。官舎の庭でゆっくり眺めたのは春になって枯木をつつきにくるあかげらと、秋から冬にかけておんこの実をついばみになるしじゅうからぐらいなものだ。しじゅうからの鳴き声は、その名のおり「シーシーカラ」とか「チンチンカラ」というのだそうだが、そう教えられても実際には、よく聞き分けられない。もっとも、この鳥、アメリカでは「チッカデー」と鳴くのだそうだ。六月ごろ、甲高い声で「キョクチョー、キョクチョー」と歌っている鳥もある。そういえば、去年の秋ごろからしきりに群がって「ガクチョウノガクチョウノ」とさえずっているのはなんという鳥だろうか？ 百家総鳴、いや、のどかのにぎやかな学園である。



変り行く商大



小樽高等商業学校時代



講演



工事中の研究室



テーブル・磁気ドラム



計算機センター 古くなりに図書館

今日の川樽商大の姿



学館喫茶部



磁気コア



新装の体育館



智明寮から見たキャンパス

学園生活



学生会館完成



1964、東京オリンピック



聖火リレー



道への砕粉韓日

日韓協定最終段階へ

東園塾 許州の

あつた、不正協定の
の前提として
この正協定

正式調印時の
敗北

韓人兵の退去と協定
対協定を締結し、協定
に協定した韓軍事協定は、ついに
日本の内閣内閣との間で
協定した

六月二十一日
協定した

あつた、不正協定の
の前提として
この正協定

あつた、不正協定の
の前提として
この正協定

あつた、不正協定の
の前提として
この正協定

闘いの経過と中間的総括

十一月十二日午前零時十六分政府自民党は衆議院本会議において一切の議事を中断し、わずか三十五秒で日韓協定案件を一括強行採決した。十四年間の長期にわたる日韓国交回復の試みは、佐藤内閣の議会制民主主義の仮面をもぬぎすてた露骨きわまる高姿勢正面突破作戦の前に、いま一気を実現されんとしている。こうした佐藤内閣の不退転の決意の前に、反対闘争は一方的に押しまくられている感がある。われわれ新聞会はずでこの日韓協定の侵略性、反動性を何度も訴え闘い続けてきたが、自然承認まであとわずかの日数しか残していない現段階において、あくまで日韓協定砕粉の闘いの強化のために、これまでの闘争の中間的総括と、その展望をさぐってみよう。

押しまくられる反対闘争

全国的



緑丘祭で講演する、早大、松浪信三郎先生

緑丘寄贈講座



大和証券 岡田先生



猪木正道先生

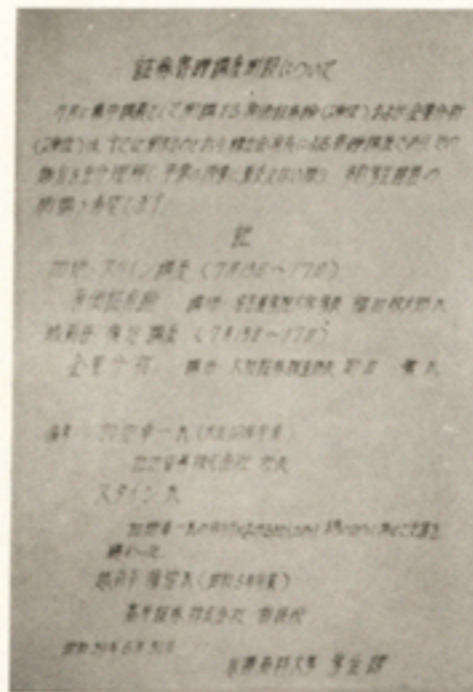


福田敬太郎先生



H・H ガース博士

毎年夏から秋にかけて
本州の一流学者が緑丘の
坂をのぼる。加茂学長が創案
した寄贈講座は昭和三十三年に
はじまった。それは外国の例を
とって校友の力を学園に繁栄
させ、スタッフとの関係を密接にする
小規模大学の欠点は、その様にして
おきなわれる。学生はそれを新たな
学問の吸収と意欲の向上に利用してきた



大河内一男先生

小林多喜二文学碑



除幕式で挨拶する伊藤整氏

加茂学長 離樽

1965. 11. 28



機上の人となる



わかれを惜しむ学長夫妻



寮

祭



智
明
寮



おたる



小樽の夜景



運河



高架



オフィス街



外国船



日銀小樽支店



塩谷海水浴場

思い出



雪の街





阿部俊雄



安達和興



新屋敷洋一



浅田孝之



伴昭世



檀上滋



土門昌充



道幸勝也



藤野淳一



深滝勉



藤田耕二



福田登司雄



舟本秀男



古田勝栄



後藤田甲



羽場昂



芳賀謙治





橋本政勝



長谷川靖雄



人見定夫



平尾一弥



平田弘和



平塚浩司



本間 允



本間正一



本間 暹



井出隆司



飯塚光雄



井上健夫



市川英揮



入江靖孝



石川 寛



岩井雅昭



岩見勁士



柿沢昌治



上関 恕一



神谷 勝



金成日出夫



神成弘昭



笠原紘一



柏崎俊雄



川口克昭



川上勝彦



川松真紀雄



河原木義治



川島義人



菊田清次



木村攻



岸邦夫



岸正紘



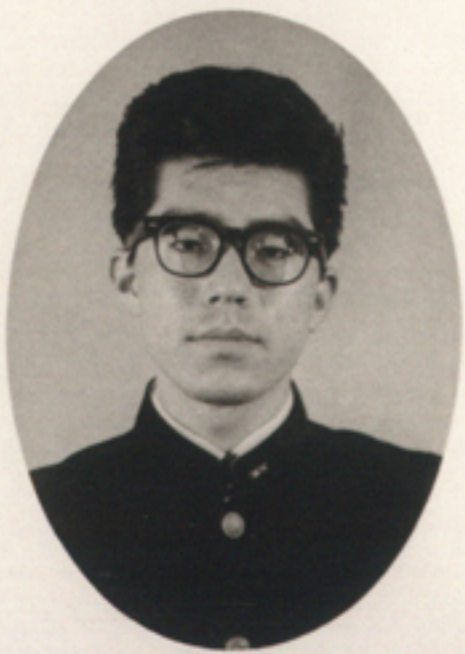
熊倉博



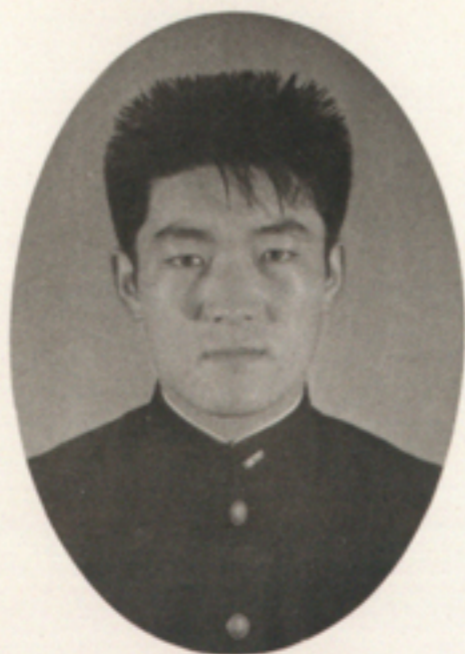
小林章



小島明



小森照三



小西京治



小沼幹夫



紺野哲也



紅露雅之



小柴弘乙



前川敏康



松野正明



松岡良行



松山隆夫



三田地康夫



宮野陽一



宮下佳宏



宮田明忠



宮内昭治



水越啓藏



村井郁夫



村井敏夫



森島竜興





森吉哲也



永田和雄



長田忠和



中林章雄



中村 昇



中野宏一



中尾宏充



難波克己



新岡 脩司



西村好弘



野坂正宣



小川一典



萩野豊治



小倉富五郎



岡田隆一



岡本 徹



桶谷喜三郎



桶屋俊之



小野寺 茂



小野 浩



大原 史朗



大広 国幸



大出 征夫



大家 昭夫



大船 喜八郎



大成 昌彦



大西 教文



大島 将義



太田 堯



大山 智



斎藤 紀夫



坂詰 勉



真田 剛



佐々木 喜四





佐藤 五三六



佐藤 隆寿



沢井 信夫



椎名 昭夫



嶋田 将亚



島村 高



下川 哲雄



下山田 耕造



新門 忍



塩井 能成



城座 勝明



杉本 匡彦



鈴木 行二



鈴木 昇



鈴木 保



鈴木 幸功



関 修



高橋賢治



高橋真之



高橋忠男



高井 明



高見 学



高山正治



高柳雅美



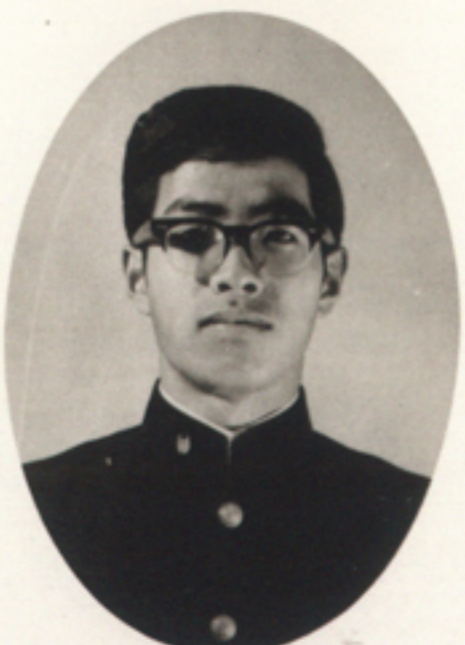
竹島和之



竹内 晃



竹内充男



田村良勝



民谷 栄



谷原修身



谷口真一



千葉祐三



茅根健



寺山達



登坂宏



上野成斌



梅津忠貴



宇佐美明雄



磯井 燎



内堀 厚



内田孝和



若林信夫



若松道範



渡部 明



山田耕三



山崎敏一



山沢 宏



八代昭彦



八柳英男



吉田尚可



吉田隆雄



吉田正司



吉岡克人



湯浅征三郎



座間忠雄



平塚道矢



板坂孝二



松田邦彦



松本明



宮腰弘嗣



中島敏博



大森正志



大坪睦夫



織田一優



長内敏明



齋藤得夫



齋藤敏行



白浜尚三



田頭悠輔



高田 稔



高橋東吾



坪谷 光



上田康雄



山崎 兼一



宮平 栄仁



知念 宏





卒業式

松尾先生

卒業式は学生という身分をきれいさっぱり消してしまおう消しゴムみたいなものだ。そして、サラリーマンのハンコが押される。学生が生活者に変化する。小樽の町は緑ヶ丘の下にあったが、もう町から上へはのぼられない。現実と同じ平面、いや、現実そのものに化けてしまうのだ。洗面器は顔を洗う器物だと思っていたのに、自分自身が洗面器になるということだ。そうだとすると、アメリカの平和主義や民主主義みたいなもので、大学もまた公然たる偽善の場所だ。ふだんは大学こそ真理探求の聖域であると教え、卒業式には市長さんや同窓会の人が出てきて、皆さんりっぱな洗面器になってくださいという。学長さんは現実にも真理にも都合のいいような訓辞をされる。肥ったフタになるより瘦せたソクラテスになれ、などと訓辞をたれた学長さんもあったが、瘦せたソクラテスとは、現実と真理、現実と自己との距離をきびしく守れということではないか、つまり、現実の食欲に誘惑されないうでがまんせよというストイシズムだ。恋人は抱かずに想像でこらえよというのだ。瘦せるにきまっている。だがそんな芸当がわれわれにできるだろうか。アメリカの大統領だってベトナムのジャングルの泥沼の洗面器に顔を突こんでから平相のお説教をするがいい。それにしても、卒業式にふきげんな顔をするのは知性のとぼしい証だ。大学よりも訓辞よりも、私自身が問題だ。

編集後記

緑丘生活もいよいよ終ろうとしている。学生諸君の酷評と不安の中でこのアルバムはできあがった。つくる技術が充分にありながら今まで他人任せだったのを、初めて、すべて学生で作った意義深いものである。ただ最初だけに両足なものでなかった。しかし、今後はこのアルバムを基礎にもっと立派なものができることとなるだろう。

何年か後に、同窓生と、あるいは家族と共にこのアルバムをひもとく時、緑丘生活の思い出となるだろう。四年間の生活の記録でもあるからだ。

アルバム作成にあたり御協力下さいました陣内写真館、写楽カメラ店、末広中学齊藤正美氏に深く感謝したい。

一九六六・二・一

上田 康雄
相崎 俊雄

